

*The 30th Annual Meeting of the Japanese Association of  
Dermatologic Surgery*

# 第30回日本皮膚外科学会 総会・学術集会

プログラム・抄録集

平成27年10月10日(土)・11日(日)

兵庫医科大学 平成記念会館

〒663-8501 西宮市武庫川町1-1

## 55 Keratoacanthoma centrifugum marginatum の 1 例

清永千晶(きよなが ちあき)、猿田 寛、松田光弘、大山文悟、大畑千佳、古村南夫、濱田尚宏\*  
名嘉真武国

久留米大学、\* 濱田皮膚科医院

53 歳男性。2006 年 3 月より左母指基部手背側に紅色結節を認めた。8 月には 4 cm 大の腫瘤を形成し、近医にて皮膚生検を施行され脂漏性角化症の診断となる。しかしその後も遠心性に拡大し改善なく、2014 年 1 月当科紹介受診となった。

初診時、左手背から手関節部にかけて辺縁に厚い痂皮が付着し一部潰瘍形成を伴う暗紫紅色調の結節が多発し、中央部は痂痕を形成していた。各種培養検査はすべて陰性であり、1 回目の皮膚生検では確定診断に至らなかった。その後も病変は拡大傾向にあり、初診の 4 ヶ月後に再度皮膚生検を施行し、keratoacanthoma centrifugum marginatum の診断となった。

造影 CT 検査では明らかな遠隔転移は認めず、まずは保存的加療としてイミキモド外用を試みたが、激しい刺激症状のため中断した。エトレチナート内服も考慮するが慢性 C 型肝炎があり投与は困難であったため、皮膚悪性腫瘍切除術及び分層植皮術を施行した。

非常にまれな keratoacanthoma の 1 亜型であり、ここに報告する。

10 月 11 日(日)2 日目 ポスター会場 13:15 ~ 13:30

## 56 両鼠径部に発症した基底細胞癌の 1 例

吉岡未里(よしおか みり)、稲福和宏  
君津中央病院 皮膚科

症例は 65 歳、男性。8 年前より陰茎根部に「いぼ」が出現し、徐々に鼠径部まで拡大、1 年前より出血を伴うようになった。栄養失調で他院入院中に行われた組織病理学的検査により基底細胞癌と診断され、当院紹介となった。

右鼠径部から陰囊にかけて 80 × 35mm の黒色結節を認め中央は潰瘍となり、左鼠径部に 50 × 20mm の黒色結節が確認された。画像上、遠隔転移は認めなかった。

それぞれ 10mm マージンをとり右鼠径リンパ節を合併切除した。精巣は温存し、人工真皮貼付し感染をコントロールした後、恥骨部から陰囊皮膚欠損部に対してメッシュ分層植皮を行った。陰囊部の上皮化に時間を要したが経過良好につき退院となった。

10 月 11 日(日)2 日目 13:40 ~ 13:50

## 57 基底細胞母斑症候群の 1 例

貝淵かおり(かいぶち かおり)、横田憲二、松本高明、村上佳恵、秋山真志、松立吉弘\*、久保宜明\*  
名古屋大学、\* 徳島大学

35 歳男性。2013 年 12 月に近医歯科より上顎左側臼歯部の埋伏歯の抜歯目的で当院歯科に紹介受診。抜歯を行うために CT を撮影したところ上下顎内に多発顎嚢胞を認め、大脳鎌や小脳テントに石灰化像を認めた。

2014 年 1 月 基底細胞母斑症候群が疑われ当科に紹介となり受診した。皮膚所見としては 2005 年頃より右鼻翼に常色結節が出現し、徐々に大きくなってきており、初診時には右鼻翼に 1 cm 大の可動性不良な硬い常色結節を認めた。皮膚生検によって基底細胞癌と診断し、全摘術施行。その他所見としては前頭突出、両眼隔離があり特徴的な顔貌認めた。掌蹠の小陥凹はなく、家族歴も認めなかった。

遺伝子検索をしたところ PTCH1 遺伝子変異を認め、基底細胞母斑症候群と診断した。現在も当科にて経過観察中である。

基底細胞母斑症候群の典型的な症例を経験したので報告する。

## 58 肛門 Paget 癌の 1 例

小野友華(おの ゆか)<sup>1</sup>、有馬 豪<sup>1</sup>、安藤亜季<sup>2</sup>、升森宏次<sup>3</sup>、山北高志<sup>1</sup>、岩田洋平<sup>1</sup>、松永佳世子<sup>1</sup>  
1) 藤田保健衛生大学 皮膚科、2) 刈谷豊田総合病院 皮膚科、3) 藤田保健衛生大学 下部外科

68 歳、男性。以前より痔核で近医外科通院中。生検で肛門 Paget 癌と診断されたため、治療目的で当院へ紹介された。初診時、肛門周囲に紅色腫瘤と右鼠径リンパ節腫脹を認めた。

Weekly ドセタキセルを 1 クール施行した。肛門 Paget 癌と右鼠径リンパ節腫脹の縮小を認めた。その後、拡大切除、分層植皮術、鼠径リンパ節郭清、人工肛門造設術を施行した。

術後 5 ヶ月で貧血(Hb7)と血小板減少(70000)を認めたため、近医内科より紹介された。全身検索の結果、肝転移、多発リンパ節転移、多発骨転移を認めた。多発性骨転移を伴う骨髄転移で貧血、血小板減少が出現したと考えた。

Weekly ドセタキセルを 2 クール、Weekly パクリタキセルを 1 クール施行し、貧血(Hb9.1)、血小板減少(164000)の改善を認めた。その後、外来で Weekly パクリタキセルを施行中である。今回タキサン系による化学療法が奏効し、貧血と血小板減少が改善したので報告する。

10 月 11 日(日)2 日目 13:50 ~ 14:10